休業を命じたる職工等

に対しては全部の給料を支給する外特に出勤を命じたる左の各工場に勤務する職工職夫に対しては日給額の一日分を支給することを示せり

▲熔鑛炉全部▲同調査係全部▲同調査田工場一部▲倉庫書電所一部▲第一第二汽罐場全部▲第一第二第三汽罐場▲同附属修繕工場▲電氣係全部▲同上係谷山電気係▲水給排全部▲運輸一部▲監理部一部

郷音全く止む

より薄く弱き煤煙

製鐵の命脈僅に繋がる

ばかりに過ぎず他の工場に於ても僅に熔鑛炉の命脈あるのみなれば殆んど製鐵所の全工場は休業を爲したるに

渡日飛行機の火災

乗組四名は幸に無事

サロニカより羅馬に引返す

羅馬來電に曰く東京に向け飛行の爲出發せるカプロニー三葉機の一機はサロニカ到着の際火災を起して燒失せり飛行家四名は幸に負傷を免れ伊太利に向け歸還せり他の偵察用飛行機は二月廿一日東京に向ふ爲バグダットに向けフレッポを出發せり（一日發電）

意見

南部文書課長談

七日午後四時を期し作業中の職工に駆布せる製鐵所の覺書に就き中川次長に代りて南部文書課長は語る「製鐵所が頒布せる覺書に對して之を受けたる職工よりは何等の所感を述べるものあるを認めず之に對して意見等を提出すべき道理なきものと思惟せり本所の職工を以て組織し七日午後會式を挙げたる同志會の如きは一言も覺書に關して言及せざりしと聞けり此の覺書を頒布したる理由は五日烏帽子以下四名の職工より五夕條の嘆願書を次長の許に提出するものあり其の結果に就き七日午後六時を期して一般職工が不安の色ありしを認めたる熔鑛炉の中二基は運轉中止せるが熔鑛炉の保護に就きては製鐵所に於ても最も注意を配せし處にて之れに關し廣幾熔鑛炉の作業を監督せる某技手は曰く「七日午後に至り遂に二本の熔鑛炉が凝結して了ひました元來熔鑛炉は火を入れないやうになつても十時間は別狀を呈しないものですが それ以上を經過すれば熔鑛の凝結を來たして如何とも策の加へ様がありません凝結した鑛は之れを叩き破つて取出し更に新に始めから入れ直す外はありませんが一本の鑛を建設するのに二百萬圓を要したと云はれて居ます命ほど現在六本の熔鑛炉の外に昨年から更に一本新設中のものがありますが竣成までには猶時日を要する見込ですが熔鑛炉は云ふ迄もなく鐵鑛を熔解せしむる重要な機關ですから二本の炉が凝結すれば其の影響は決して尠ないものではないと思はれます」

首謀者七名

假豫審

勞友會々長以下令狀を執行さる

八幡警察署に假釈放中の勞友會々長以下七名は七日午後二時八幡地方裁判所に於て豫審判事の取調中なりしが七日夜半に至り左の七名は遂に起訴されると同時に令狀を執行され豫審判事の手に遂されたり

▲勞友會長淺原鉄三▲同副會長西田徳太郎▲同外事吉村眞澄▲同庶務柴一▲坂本央▲同居重樹▲鍋住芳一

此れが爲め小倉區裁判所よりは八日午前十時自動車にて平田河野兩豫審判事數名の書記を從えて八幡に來り直に八幡署に入り假豫審廷を開き取調を開始せり尚ほ午後よりは檢事局と打合せの結果更に自動車を驅り八幡市中某々方面に向つて嚴重なる家宅捜索を行へり

更に各地より

憲兵増派

各憲兵隊より五十三名

警保局事務官視察

製鐵所事件警戒の爲七日迄來援せる福岡縣各警察署及警察部よりの應援警官は五百四十六名に達したるが更に東京憲兵司令官の命に依り八日廣嶋・岡山・姫路・久留米の各憲兵隊より都合五十三名の憲兵來援し直に所内及所外に於て夫々警戒の部署に就けり又東京警保局事務官天宇敬次氏は七日午後十時守山駅に到着し直に八幡

夜勤職工に係る

同志會發會式

遺間同樂獅生座に開催

八幡製鐵所職工同志會發會式夜勤の分は七日午後六時より遺間同樂獅生座にて開催したるが聞きたる上國粹會として兩者の疎通を圖り圓滿なる解決を告ぐるに一時の力を盡す考へにて如何なる方法を以てするかは兩者の意見を知悉したる上研究すべく未だ發表し難きものあり」

無根の蜚語を放つ

七日夜の八幡市

作業を發表したる製鐵所にては日夜は所内各工場の警戒一層嚴重なるものあり中川次長は午前零時

に中川次長を訪ひ國粹會として製鐵所側勞友會並に職工側との調停を試みんと申出で同日午後一時より勞友兩會並に職工側の意志を聴取し友愛の友愛會報告會を聴取し友愛會並に職工側の意志を聴取する處ありたるが氏は曰く「此より製鐵所に中川次長を訪ひ其意見を聞きたる上國粹會として兩者の疎通を圖り圓滿なる解決を告ぐるに一時の力を盡す考へにて如何なる方法を以てするかは兩者の意見を知悉したる上研究すべく未だ發表し難きものあり」

森戸事件の

求刑

次回は來る十四日

特別弁護人内田氏の辯論

森戸大内両教授公判は既報の如く七日午後四時十分再開金山檢事の論告に次佐々木聽一博士の二時間に亘り工藤博士を挿び六時閉廷せり次回は來る十四日十一時二十分の